tums
TOWAKAI UNIVERSAL MEDICAL SERVICE

タムス浦安病院4月オープン

回復期医療の充実期待

医療法人社団城東桐和会は4月、浦安市高洲に回復期医療のリハビリや緩和ケアを中心にした新病院「タムス浦安病院」を開院する。院内には千葉大学病院浦安リハビリテーション教育センターも併設。臨床だけでなく高次脳機能障害や認知症などに対する研究・教育拠点として注目されている。地元の浦安市と千葉大、同法人が強い協力関係のもとで運営する同病院について、浦安市の内田悦嗣市長（53）、千葉大学医学部附属病院の山本修一病院長（61）、同法人の岡本和久理事長（54）に聞いた。

タムス浦安病院について鼎談（ていだん）する左から内田市長、山本病院長、岡本理事長

―タムス浦安病院はどのような病院ですか。

岡本　タムス浦安病院は4月から保険診療がスタートします。病院は4階建てで延べ床面積は約1万平方㍍。ベッド数は200床です。回復期リハビリテーション病床が134床、地域包括ケア病棟が45床、緩和ケア病棟が21床で、回復期の患者を支えることに主眼を置いた病院です。

千葉大と連携し、回復期を支える医療人材の育成、新たな治療方法の開発などを想定しています。浦安市の協力もあり、3者の強い協力関係のもと、患者の尊厳を尊重した安全・安心な医療と福祉を提供する一方、地域と連携してより良い生活と豊かな人生を支え、健康寿命を延ばし、健康格差を縮小することを目指しています。

―どういう経緯でこの3者が連携したのですか。

内田　浦安市には急性期の病院はありますが、回復期のリハビリは市外に行くことが多い状況で、そこで、回復期のリハビリをやってもらえるような病院を誘致しようと、近隣の江戸川区などで実績があり、千葉大病院と連携していただける城東桐和会を病院事業者に決定しました。

山本　それもありますが、千葉大と浦安市が（2015年に）包括的連携協定を締結したことに始まります。浦安市と医療だけでなく教育を含めて連携しようと、学長と前の市長が協定を結んだのです。

―それぞれの役割は。

内田　この病院は浦安市が一番求めていたものです。ですから、市として新しい病院を誘致して、土地を貸すだけで終わりではなく、最近関心が高まっている高次脳機能障害の対応など、病院を核に市民の健康のため、いろいろなことをしていきたいと思っています。

山本　今、医療の細分化が進み、大学病院はその中でも最も高度なところを担うのが使命となり、教育もそこに偏っています。高齢化が進む中、かつては後方支援とも考えられていた回復期やリハビリ、緩和ケアという領域が非常に強くなり、若いドクターの中には行きたがらない教育、研究のフィールドとして活用できると期待しています。

―浦安市、千葉大病院、城東桐和会がうまく連携していけるようにするのが私たちの役割です。多職種の方が縦横に連携し地域包括ケアを実践することで、病院から家に帰った後の通所やリハビリなども提供していきます。

岡本　臨床だけでなく、教育・研究ができる態勢を整え、それを浦安市民に発信するのが目的です。今までのリハビリ病院とは違う若い先生が集まるような新たな地域包括ケア、緩和ケアが浦安にあると感じてもらいたいのです。なるべく新しい回復期の治療法に取り組みます。内田市長は高次脳機能障害に非常に詳しかったので、この分野を進めることができます。浦安市はブランド力があり、新しいことを発信しやすいと思います。

日本では退院後、同じドクターやナースがそのまま診てくれるシームレスな体系ができていません。今まで緩和ケア病床は入って最期を迎えるという考え方でしたが、在宅医療も進んだため、病院を出たり入ったりという風に変わります。

その時、（桐和会グループの病院では）なるべく同じチームで診るようにしたところ、患者にとても喜んでもらえました。浦安ではもっと体系立てて進めていきたいと思います。若い先生も以前は慢性期の医療に興味を持つ人は少なかったが、段々増えています。

山本　以前は急性期で疲れたドクターが行くという印象でしたが、変えなければなりません。「医療の中で重要なパーツだ」という意識改革が必要です。この病院を千葉大としてリハビリや回復期医療に光を当てる起爆剤にしたいのです。

―全県的に回復期リハビリテーション病床が不足していると聞きましたが。

山本　現状足りませんが、追いついてくるという予測はあります。

内田　医療の進歩により昔なら助からなかったような重症患者も、今は救命される時代です。ただ、命は取り留めても障害が残る可能性があります。そこで「リハビリでどうやって機能回復ができるか」というニーズが出てきたと思います。

山本　千葉大もリハビリテーション部がありますが、手術をした後、いかに早く自宅に帰っていただくかに主眼が置かれています。救命後の障害にまで大学病院は十分にケアできません。ですが、それでは社会に戻ってから困ってしまいます。いかに良い状態で助かった命を活用していただくかが重要です。「次はそこだ」と思う若い人たちはもう研究しています。（千葉大は）そういうフィールドを用意したいのです。

内田　治療後、社会に復帰したくても、障害が残り「車が運転できるのか」「雇用者が（患者に）車の運転を任せられるのか」ということを判断してくれる病院は少ないです。その中で城東桐和会さんがこの葛南地域で取り組んでもらえるのは素晴らしいことだと思います。千葉大も一緒にやってくれるという意義も大きいです。そういう中で、この病院はわれわれにとって得、二両、三両得になる仕組みだと思います。

―城東桐和会の目的は。

岡本　人材確保も実績があります。われわれが本当にやりたい教育と研究にリソースを集中できるのではないかというのが本当の期待です。

岡本　おそらく、病院は入院する所という概念が変わると思います。退院した後、どう病院と関わるか。地域包括ケア、多職種連携を教育・研究と絡ませて、体系化したいのです。それを若い先生にも広げるための、先例にしたいのです。それこそが、千葉大と浦安市への恩返しであり、私たちがやらないといけないことだと思います。

高次脳機能障害　事故や病気による脳の損傷により生じる認知機能の障害。約束を忘れるなどの記憶障害や集中力が持続せず同時に複数のことができない注意障害、計画をたてられない遂行機能障害、情緒不安定になる社会的行動障害などが主な症状。

千葉大学病院の研究教育機関も併設

※完成イメージ

県境をまたぐ新たな医療構想

内田　悦嗣氏
（うちだ・えつし）

1965年2月13日、浦安市生まれ。国学院大学法学部卒。浦安市職員、会社役員を経て、2003年、同市議初当選。2007年4月、県議初当選（3期）。2017年3月、浦安市長初当選。

―浦安市はどのような支援をするのですか。

内田　今回の病院ができる高洲7丁目には、ラグビートップリーグチームのグラウンドや特別養護老人ホーム、高校、中学校などがあり、健康や医療、介護などの課題に対応できるような機能集積が図られています。そこで、千葉大などいろいろな能障害や緩和ケアなどいろいろな部分で必要な支援を考えます。

今回の取り組みはある意味、一つの挑戦なのです。県の保健医療計画は当然県単位でしか考えていません。しかし、旧江戸川を越えて東京から浦安に患者が来てはいけないということはありません。実際に救急車は行ったり来たりしています。県境を越えた生活圏に、浦安市として、千葉大として、そして江戸川区で東京さくら病院などを運営されている城東桐和会が、どんなことができるのかという新たな枠組みだと思います。

山本　県境をまたぐ新たな医療構想ですね。われわれとしても「一地方大学ではないんだぞ」という矜持（きょうじ）があります。〝東京に反抗〟ではありませんが、県境を越えるというのは働く者のモチベーションの意味でも重要です。

―病院が目指す将来像を教えて下さい。

岡本　千葉大のセンターが中にでき、特任教授が何人か来てくれます。その彼らが、臨床だけでなく教育や研究をしてもらい、やってよかったと言われるよう、そして大学や浦安市にとってこのプロジェクトが良かったと思われるような実績をどうやって出すか。そのために浦安市からもサポートしてもらっていますし、大学からも優秀な人材を派遣してもらっていますので、私たちは全力で取り組みます。

山本　（医師の派遣よりも）ここで人を育てることに重要性があります。どんどん東京の大学に行ってしまっている若者がここでとどまり、ここで育っていくことが重要です。もちろん、病院を動かすのに必要な人数はあるので、可能な限り応援します。城東桐和会は病院経営が非常に上手でしていますし、千葉大病院はわれわれにとって教育、研究のフィールドとして活用できると期待しています。

―城東桐和会の目的は。

岡本　臨床だけでなく、教育・研究ができる態勢を整え、それを浦安市民に発信するのが目的です。今までのリハビリ病院とは違う若い先生が集まるような新たな地域包括ケア、緩和ケアが浦安にあると感じてもらいたいのです。なるべく新しい回復期の治療法に取り組みます。内田市長は高次脳機能障害に非常に詳しかったので、この分野を進めることができます。浦安市はブランド力があり、新しいことを発信しやすいと思います。

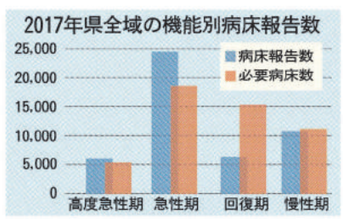
日本では退院後、同じドクターやナースがそのまま診てくれるシームレスな体系ができていません。今まで緩和ケア病床は入って最期を迎えるという考え方でしたが、在宅医療も進んだため、病院を出たり入ったりという風に変わります。

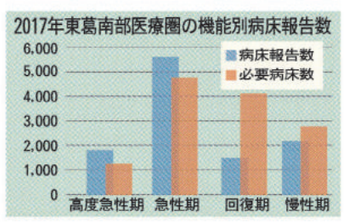
その時、（桐和会グループの病院では）なるべく同じチームで診るようにしたところ、患者にとても喜んでもらえました。浦安ではもっと体系立てて進めていきたいと思います。若い先生も以前は慢性期の医療に興味を持つ人は少なかったが、段々増えています。

山本　以前は急性期で疲れたドクターが行くという印象でしたが、変えなければなりません。「医療の中で重要なパーツだ」という意識改革が必要です。この病院を千葉大としてリハビリや回復期医療に光を当てる起爆剤にしたいのです。

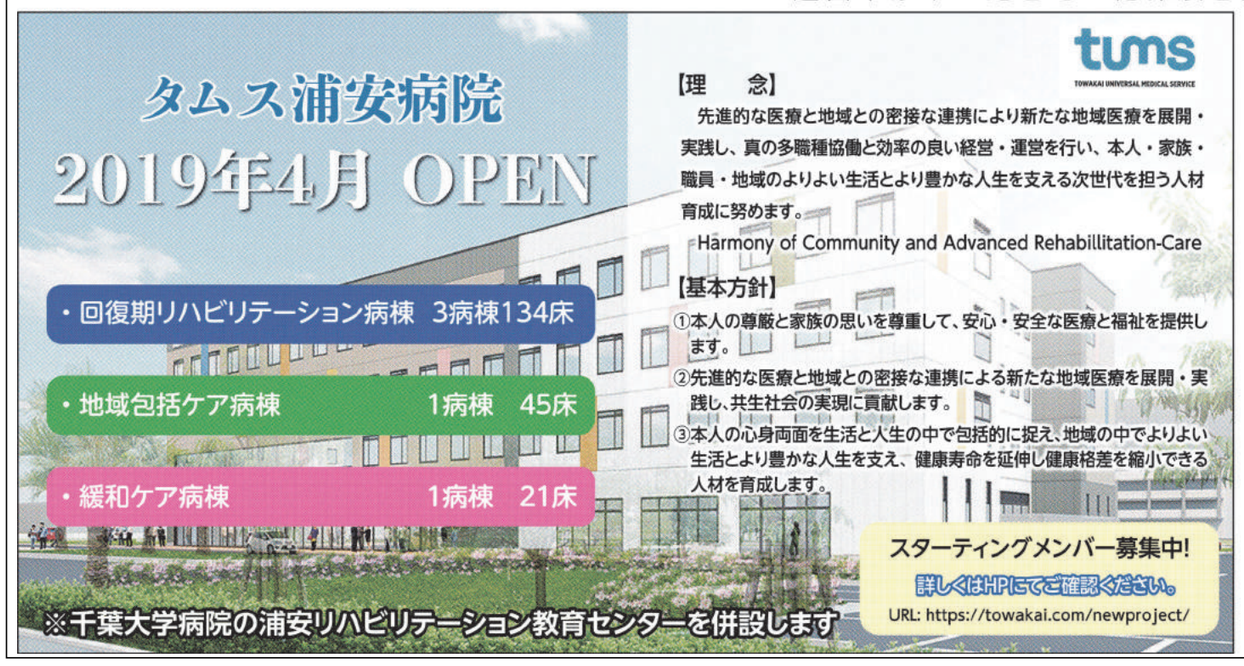
山本　修一氏
（やまもと・しゅういち）

1957年10月5日、東京都生まれ。千葉大大学院医学研究科修了。2003年から千葉大大学院医学研究院眼科学教授。2014年から千葉大医学部附属病院長・千葉大副学長。





高まるニーズ　回復期医療に光

岡本　和久氏
（おかもと・かずひさ）

1964年7月10日、東京都生まれ。千葉大医学部卒。1993年12月、医療法人社団桐和会を設立。同会、城東桐和会、社会福祉法人桐和会、同法人春和会理事長など歴任。